



スイセン

128 編、129 編、130 編はすべて **都に上る歌** です。

128 編は巡礼の旅に出ようとする若い人への饒の言葉と読み取れます。この人は **いかに幸いなことか／主を畏れ、主の道に歩む人よ。(1)** と評価されているのです。敬虔で、思慮深く、勤勉な若者の姿を思い描きます。**あなたの手が労して得たものはすべて／あなたの食べ物となる。あなたは**

**いかに幸いなことか／いかに恵まれていることか。(2)** と、仕事に恵まれ、安心して生活ができ、**妻は家の奥にいて、豊かな房をつけるぶどうの木。食卓を囲む子らは、オリーブの若木。(3)** と、良き妻、元気な子らに恵まれ、穏やかな生活ができると祝福しています。これは誰もが願う将来の姿ではないでしょうか。詩人は **見よ、主を畏れる人はこのように祝福される。(4)** と、若者たちを励ましています。詩人はこのような若者が作る世界を夢見て **シオンから／主があなたを祝福してください。命のある限りエルサレムの繁栄を見／多くの子や孫を見るように。イスラエルに平和。(6)** と祝福の祈りを捧げています。

一方、129 編は艱難辛苦を乗り越え、意固地にはなったものの、イスラエルの民であるという念が強い老人の歌のように読み取れます。**イスラエルは言うがよい。「わたしが若いときから／彼らはわたしを苦しめ続けたが／わたしが若いときから／彼らはわたしを苦しめ続けたが／彼らはわたしを圧倒できなかった。(1,2)** と、二度も繰り返す **彼ら = シオンを憎む者** に受けた苦難を述べ、しかし負けなかったと言います。その苦難とは **耕す者はわたしの背を耕し／畝を長く作った。」(3)** という過酷なものでした。骨が折れ、肉が裂ける長い苦しい日々を過ごしたのです。しかし詩人は **主は正しい。主に逆らう者の束縛を断ち切ってください。(4)** と、正義と公正の主を信頼しています。苦しみゆえの呪詛の言葉も付け加えています。**シオンを憎む者よ、皆恥を受けて退け。抜かれる前に枯れる屋根の草のようになれ。刈り入れても手を満たすことはないように。穂を束ねてもふところを満たすことはないように。(5,6,7)** 詩人は **シオンを憎む者** には主の祝福は断固分け与えられるべきではないと言います。

130 編の詩人は **深い淵の底から(1)**、**嘆き祈る(2)** 人であり、**主よ、あなたが罪をすべて心に留められるなら／主よ、誰が耐ええましょう。(3)** と罪に慄き、罪の意識に苦しむ人です。けれども、しかし、**赦しはあなたのもとにあり／人はあなたを畏れ敬うのです。(3)** と、主が罪を赦されると信じます。**わたしは主に望みをおき／わたしの魂は望みをおき／御言葉を待ち望みます。(5)** と赦しの言葉を切望しています。**わたしの魂は主を待ち望みます／見張りが朝を待つにもまして／見張りが朝を待つにもまして。(6)** と語句が繰り返されるのは、アリヤに続いてコーラスが歌うかのようです。**主は、イスラエルを／すべての罪から贖ってください。(8)** との詩人の信仰こそ、罪深い人間すべての希望です。

『讚美歌 21』は 130 編をルター作詞・作曲の 160「深き悩みより」 <https://sanbika.blog.ss-blog.jp/2010-08-10> を挙げています。ジュネーブ詩編歌は 128 編～130 編へと順に視聴できます。

128 編 [https://www.youtube.com/watch?v=QZJeYH2L\\_Ns&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=128](https://www.youtube.com/watch?v=QZJeYH2L_Ns&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=128)